

百済系単弁軒丸瓦考 : 九州発見朝鮮系古瓦の研究 (二)

小田, 富士雄

<https://doi.org/10.15017/2328415>

出版情報 : 史淵. 95, pp.129-165, 1966-02-15. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

百済系単弁軒丸瓦考

——九州発見朝鮮系古瓦の研究 (一) ——

小田 富士雄

目次

- 一、緒言
- 二、百済系単弁軒丸瓦の出土遺跡
- 三、単弁軒丸瓦に関する諸説
- 四、単弁軒丸瓦私考

一、緒言

九州地方に発見される朝鮮系古瓦のうち、先に豊前地方に分布する新羅系古瓦について考察するところがあったが、⁽¹⁾今回は新羅系古瓦を出す遺跡とも重なった分布を示す百済系単弁丸瓦をとりあげることとする。

本稿にとりあげようとする資料は、「素弁丸瓦」或は「九州式単弁瓦」などの呼称で九州の研究者に知られているが、その行なわれた年代や系統についても諸説があつて決着をみていない。これらの問題がとりあげられたのは第二次大戦前のことであり、それ以後は進展していない現状である。しかし資料の面では類例の発見を加えて、豊前、筑前、筑後、肥前、豊後の北九州各地に及ぶこととなつたので、ここに再びとりあげて考察しうる段階に達していると思われる。

註(1) 「豊前に於ける新羅系古瓦とその意義」(史淵第八十五輯)

二、百済系単弁軒丸瓦の出土遺跡

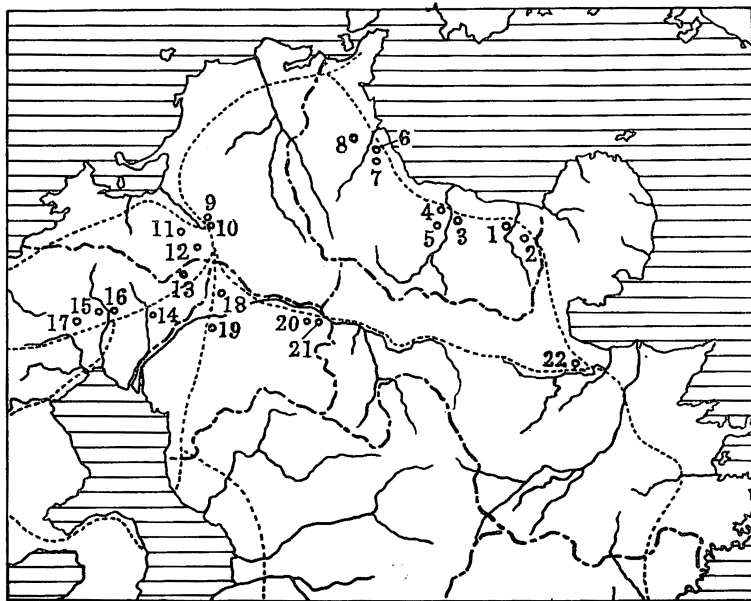
資料出土の遺跡は豊前、筑前、筑後、肥前、豊後地域にわたって分布する。遺跡を列举すれば次のとおりである。

〔豊前〕

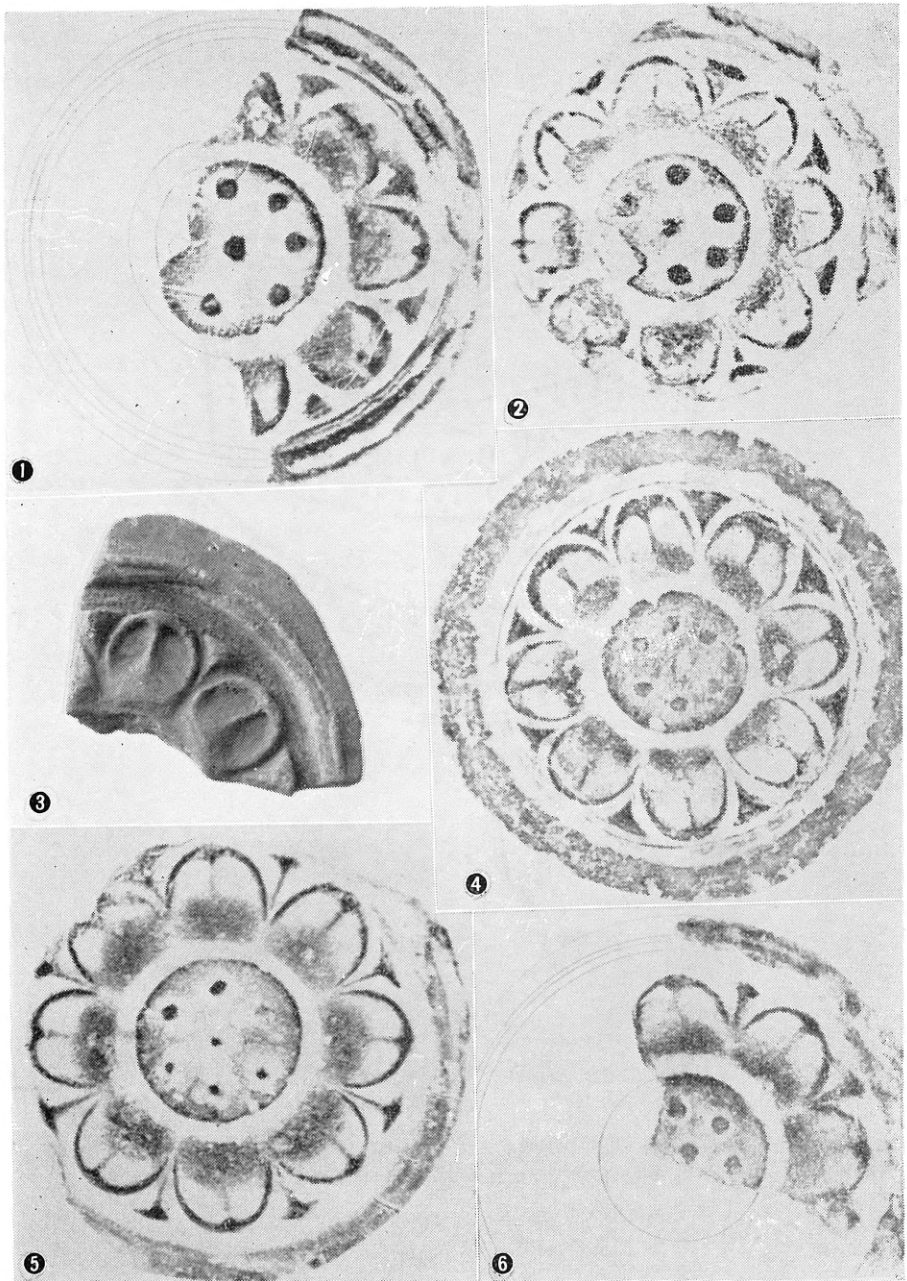
(1) 法鏡寺址(宇佐郡駅川町法鏡寺) (第2図4、第3図1)

宇佐郡四日市町の東方、駅館川の西岸丘陵上の法鏡寺部落内にある。すでに早くから人家が密集し、開墾されているので寺址の旧状はうかがえない。この遺跡、遺物については、古く中山平次郎博士が紹介され、⁽¹⁾ ついで石田茂作博士の調査がある。⁽²⁾ 地籍図にホンドウ、カネツキなどの呼称があつて往時の堂宇の存在を暗示している。かつては礎石が間隔的に並んでいたことが伝えられていて、寺址と考えられる遺跡である。単弁古瓦資料は当地の北権蔵氏が所蔵され、中山、石田両氏の報文にも登載されているが、最近では別府大学賀川光夫氏の試掘に際して新しい発掘資料が追加されている。単弁軒丸瓦を主体とし、軒平瓦では同郡

昭和三十六年

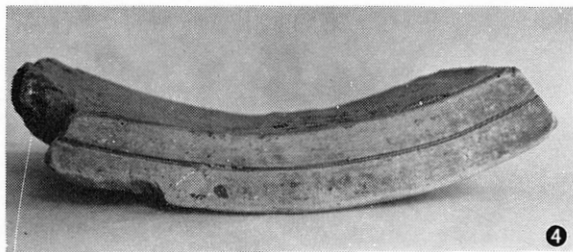


第1図 百済系単弁瓦出土遺跡分布図 (…は古代交通路)



第2図 豊前地方発見単弁丸瓦

- | | | | |
|--------|---------|---------|-------|
| 1 垂水庵寺 | 2 相原庵寺 | 3 弥勒神宮寺 | 4 法鏡寺 |
| 5 椿市庵寺 | 6 豊前国分寺 | | |



第3図 豊前地方単弁丸瓦と共伴の軒平瓦

(1. 法鏡寺 2. 弥勒寺 3. 豊前国分寺・上坂廃寺
4. 垂水廃寺・友枝瓦窯)

虚空藏寺³と同范かと思われる無縁法隆寺系忍冬唐草文⁴と、珠文縁の同系文のものが多く、従ってその建立が白鳳期であり、奈良時代後半に及ぶ頃に栄えた寺院であったと考えられる。

(2) 弥勒神宮寺址 (宇佐郡宇佐町宇佐神宮境内) (第2図3、第3図2)

宇佐八幡宮の神宮寺として神龜二年(七二五)に創立されたといわれるが、現在の神宮の地に移建されたのに伴って弥勒寺も移建されるに至った。その際に伽藍としての配置がととのえられ、東西両三重塔をもつ薬師寺式伽藍に範をとった。弥勒寺の建立は記録によって整理してみると天平十年(七三八)にはじまり、完成までに約四十年を要したらしい。遺跡の発掘調査は昭和二十九年から三十五年まで大分県教育委員会主催で六回にわたった継続調査を行い、賀川光夫、入江英親、筆者等によって報告書を作成したので、詳細はそれにゆずることとする。⁵ 単弁丸瓦は東塔址から一例発見されている。東塔の建立は天平十五年(七四三)と記されているので(益永家⁶記録)、単弁丸瓦もこの年時をさかのぼるものではない。金堂の建立に使用されたのは太宰府系(鴻臚館式⁶)のセットと法隆寺系忍冬唐草文で珠文縁あるものを⁴主体としている。

(3) 相原廃寺(中津市相原) (第2図2)

豊前を福岡、大分両県に二分する県界を流れる山国川が蛇行して北西に転ずる中流域に面する寺址で、中津市の南西隅にあたっている。遺跡は相原部落内にあり、北側に展開する広い水田地帯は条里制が施行されている。⁷ 寺址の北方五百米に東西の県道がこの地域の条里の最南端にあたっているが、寺址が条里制に組入れられていたかどうかは未解決のままである。寺址は附近の人々の間には知られていたが、第二次大戦中に森貞次郎氏が訪れ、戦後は中津市に住む吉田良介氏が資料の蒐集に努められたが、昭和二十九年に賀川光夫氏がはじめて実測調査をされて古瓦の出土地点の分布状況から法隆寺式伽藍配置案を出された。⁸ 部落内に二箇の礎石を残す粘土積み⁸の基段が宅地の地下げによって断面を露出している。礎

石は六尺二寸間隔で当初の状態を動いていないと思われる。賀川氏はこの土段を金堂址に推定された。寺址の北方に貴舟神社があり、境内に六箇の礎石と、石垣に用いられたものを加えると二十余箇を数える。神社造作に際して寄せ集めたものと伝えられる。また近くの瑞福寺に花崗岩の巨大な塔心礎がほこばれている。直径二尺一〜三寸、深さ四寸の柄穴がある。発見の古瓦は単弁軒丸瓦と、とがった篋で一線を刻んだ簡単な弧文軒平瓦の一組だけで、出土量も多いので両者の組合せは疑う余地がない。従って寺の存続期間は短いものであったと考えられる。

(4) 垂水廃寺 (築上郡新吉富村垂水) (第2図1、第3図4)

この寺址は先に新羅系瓦の出土遺跡として紹介してあるので、それにゆずる。ここでは新羅系瓦と共に単弁軒丸瓦と弧文軒平瓦の一組があつて出土量も両者相半ばしてあるので、新羅系瓦と共に創建に使用されたと考えられる。建物によって使い分けられたかどうかを知る手がかりはない。

(5) 友枝瓦窯址 (築上郡太平村友枝字新谷)

これも垂水廃寺の使用瓦を製造したところとして紹介したが、ここでは新羅系瓦と共に単弁軒丸瓦と弧文軒平瓦が発見されていて、両者が同所で製作されたことが知られる。

(6) 豊前国分寺⁽⁹⁾ (京都郡豊津町国分) (第2図6、第3図3)

これも新羅系軒平瓦を出土する最も新しい時期の遺跡として紹介した。この遺跡からも単弁軒丸瓦一例があるが、古い蒐集であるから出土地点までは知りえない。

(7) 上坂廃寺 (京都郡豊津町上坂)

豊前国分寺の南一軒半ばかり、上坂の水田中に塔心礎が埋没している。附近の人々にはかなり以前からその存在が知られていたが、徴すべき文献がない。豊前国分寺に近いところから、俗に国分寺伽藍の一部と考えられていたらしく、古い

役場の調査では同寺の伝経蔵となっている。⁽¹⁰⁾その後、森貞次郎氏の調査⁽⁹⁾や田中重久氏の論文⁽¹¹⁾で初めて上坂廃寺として掲げられるに至った。塔心礎は直径二尺八寸一分、深さ七寸二分五厘の柄穴があり、その底面稍片方寄りに径五寸八分、深さ三寸六分五厘の小孔がある所謂二重柄穴式の心礎である。現在までに発見されているのは森貞次郎氏所蔵の単弁軒丸瓦一箇があり、他には太宰府系（老司式）の扁行唐草文軒平瓦がある。軒平瓦は豊前国分寺と同范品であるから、国分寺の建立と重複する時期にあった寺院と考えることができる。

(8) 椿市廃寺（行橋市椿市町福丸）（第2図5）

これも新羅系軒平瓦を出した遺跡として紹介した。⁽³⁾この遺跡で主体をなすのに単弁軒丸瓦と弧文軒平瓦である。

〔筑前〕

(9) 四王寺山（筑紫郡太宰府町）（第4図1・2）

大宰府政庁址の北にそびえる四王寺山は、天智天皇四年（六六五）に築城された大野城の所在地として著名のところである。古くは大野山の呼称があるが、下って宝龜五年（七七四）に四天王埴像が安置された（類聚三代格卷二）。この年をもって太宰府四王院建立と考えられるようになった（扶桑略記）。四王寺山の現称は実にここに始まるものである。山頂にある四王寺部落から単弁瓦二例が発見されたのは大正時代のことで、故中山平次郎氏に紹介され、⁽¹²⁾天智築城の大野城址に所属する遺瓦であると考えられた。この種瓦の出土遺跡としては年代を知る手がかりをうる貴重な遺跡ではあるけれども、山城と寺院が重複しているので判定に慎重を要することとなった。特に、天智四年に築城された肥前椽城（基肆城）と比較してみることがある。

(10) 観世音寺（筑紫郡太宰府町観世）（第4図3）

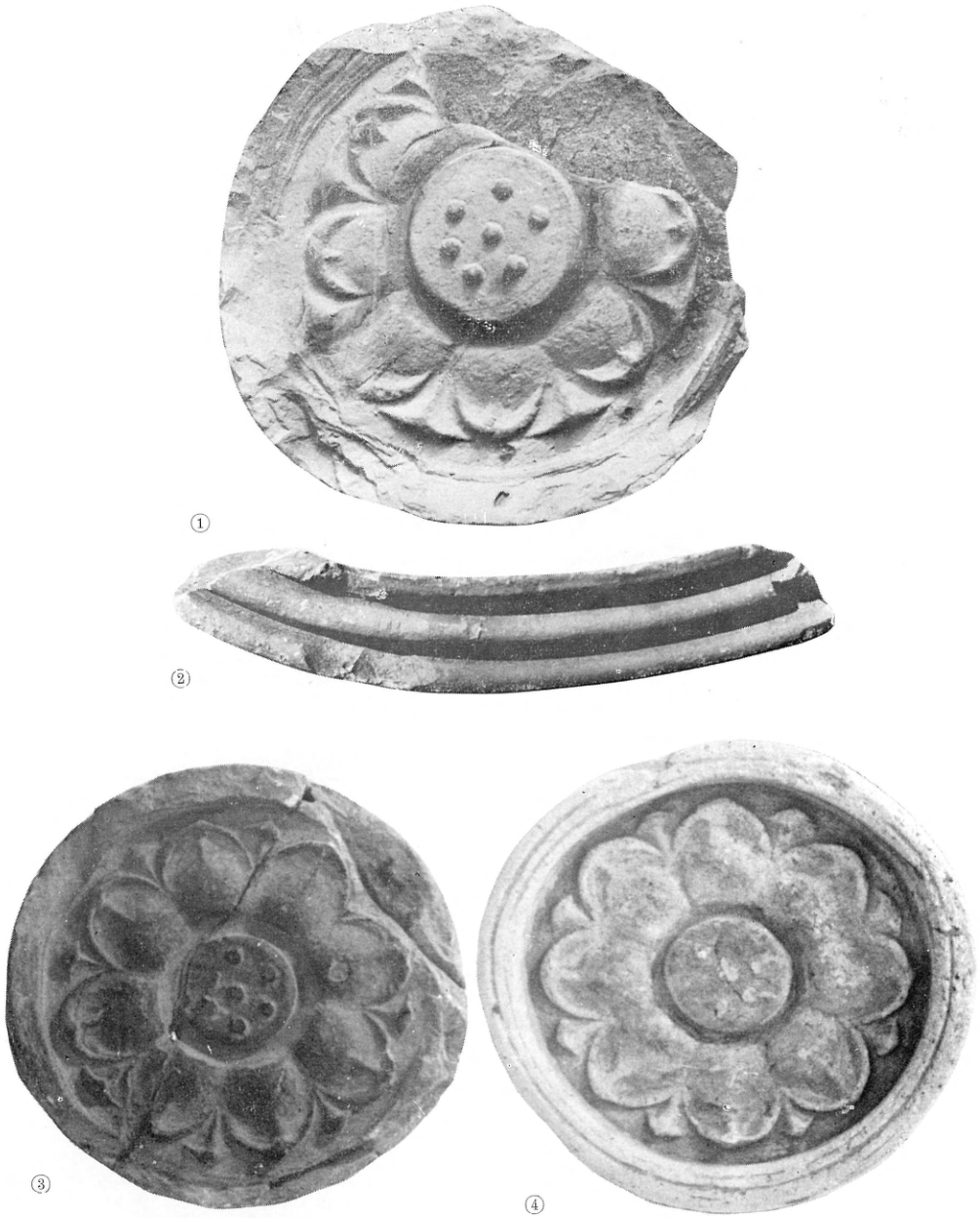
鎮西の官大寺観世音寺は、観光の名所として近年一段と盛況を加えている、がこれまでも各方面の研究対象として屢々とあげられている。その草創は天智天皇の発願にはじまり、幾多の曲折を経て天平十八年（七四六）六月に完成をみた¹¹と伝えられる（元亨釈書）。本寺の創設に使用された屋瓦は所謂太宰府系古瓦の老司系と鴻臚館系の二組を主体としている。偶々、昭和三十三年、仏像収蔵庫建設に伴なう発掘調査が実施されて、筆者の担当していた講堂址東南隅基段から単弁瓦の発見があった。中房を欠いでいるが、周縁に三重弧をめぐらしている。天平十八年以後、平安時代に及ぶまで、特別に建物の増設、改変などなかったようであるから、この瓦は太宰府系古瓦と同じく、天平十八年の完成に使用されたと考えられる。

(11) 杉塚廃寺（筑紫郡筑紫野町杉塚）（第4図5〜7）

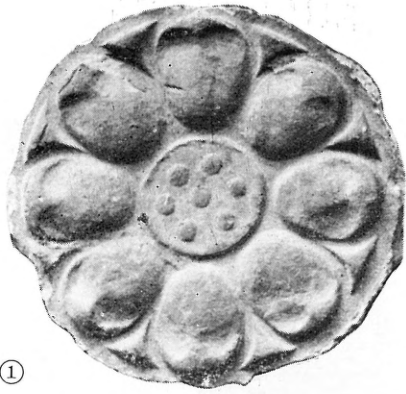
旧太宰府条坊郭の西方郭内の地、杉塚部落内に古くから廃寺と伝えられているところがある。早くから礎石がもち去られ、現在では遺構の規模をうかがうことはできない。故荻野弥七郎氏宅裏の竹楼内に基段らしきもの的一部と二箇の花崗岩礎石が残っている。荻野氏によれば、俗に「無道寺」と称される寺があったと伝えられているという。以前に中山平氏郎氏が本寺址の古瓦と伝える太宰府神社蔵軒丸瓦を紹介されたのが最も早く、筆者は昭和三十一年十二月に遺跡を踏査し、荻野氏蒐集品の中に単弁瓦三例を見出した。観世音寺所蔵古瓦のなかにも本遺跡の単弁瓦一例がある。老司系軒瓦一組と鴻臚館系軒丸瓦が共に蒐集されている。詳しい出土地点などを聞きださぬうちに荻野氏が故人となられたのは今にして遺憾である。周縁に三重弧をめぐらし、単弁の手法は四王寺例にやや通ずるところがある。

(12) 日吉神社（筑紫郡筑紫野町隈）（第4図4）

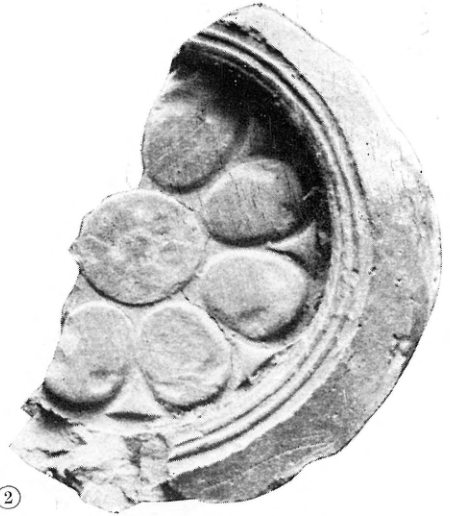
西鉄大牟田線筑紫津古間の西側日吉神社の境内から、高野孤鹿氏によって単弁瓦一箇が発見されている。ほぼ完形に近く、共伴資料もわからず、また遺跡の性格も不明である。



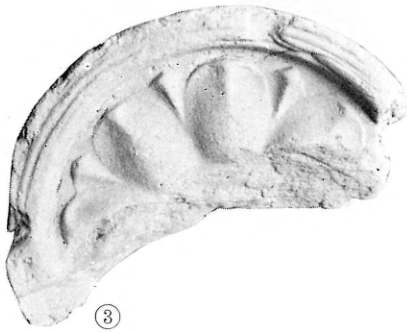
第5図 肥前地方発見単弁瓦及共伴軒平瓦(→)
 (1・2 基肄城 3・4 塔の塚麿寺)



①



②



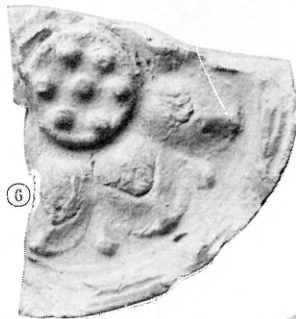
③



④



⑤



⑥



⑦

第4図 筑前地方発見単弁丸瓦及共伴軒平瓦
1・2 四王寺山 3 観世音寺
4 日吉神社 5・6・7 杉塚庵寺

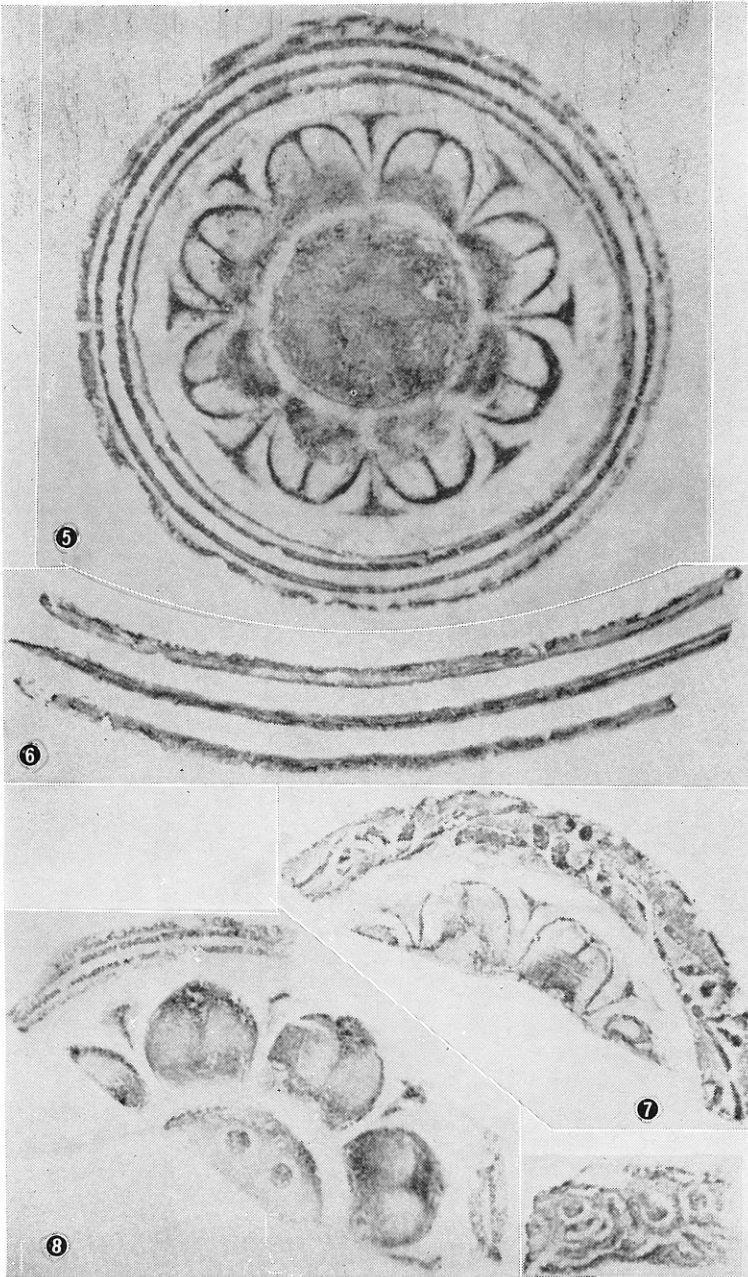
〔肥前〕

(13) 基肄城址 (三養基郡基山町小倉字丸林・大久保) (第5図1・2)

大宰府大野城と共に天智天皇四年(六六五)に築城された椽城(基肄城)は、百済人の指揮によって成った所謂朝鮮式山城である。土塁で囲まれた城内の山尾根各所に礎石を据えた建造物址が在る。なかでも大礎石群といわれるところは四列に十一列の礎石配置を示す長倉式の建造物が在ったところで、ここだけに軒瓦が発見されている。しかも単弁丸瓦と三重弧文平瓦の一組だけで葺かれていたようである。故中山平次郎氏が本址発見の単弁丸瓦を紹介されたのが初見で、当時は軒平瓦は不明であった。中山氏は天智紀に照して基肄城創建当初に比定された。その後、昭和三十三年に九州大学で城址内部遺構の実例を行ない、また基山中学校木原武雄氏等の採集によって、単弁丸瓦や重弧文平瓦の数が増加して、そのセツトは確実となった。大野城の場合、その後四王寺が建立されているので、所属年次についての疑問が生ずるが、基肄城の場合にはそのような確証がないので、より資料の安全度が高いといえよう。また単弁丸瓦自体についてみれば、周縁に一重圏をめぐらし、単弁の手法も四王寺山のものよりも豊前地域の諸例に近似している点が注目される。

(14) 塔ノ塚廃寺 (三養基郡上峰村峰村前牟田字坊所) (第5図3・4)

国鉄長崎本線中原ノ三田川間の南方約二軒の低丘陵台地に在る寺址で、塔址かと思われる南北三十八尺、東西三十六尺の方形土段と、五箇の礎石が残っていた。その後、昭和十八年にこの北方にある日達原古墳群をつぶして飛行場が建設された際に、地下げされて土段が削りとられ、単弁丸瓦二箇が発見された。⁽¹⁴⁾周縁に二重圏をめぐらすもので焼成度は弱い。故松尾禎作氏は、日達原古墳群が筑紫米多國造家の墳墓に比定されているところから、この一族によって建立された氏寺であろうと推定している。



第6图 肥前地方発見単弁丸瓦及共伴軒平瓦(5・6・7大願寺8久池井)

(15) 大願寺廃寺 (佐賀郡大和町川上字大願寺) (第6図5〜7)

大願寺部落のなかに在るために早くから破壊されたが、川上川扇状地の標高二十五米の地で筑紫山脈を北に負い、南に佐賀平野が展開する好処を選んで建立された寺院である。肥前国分寺から三軒半、国府推定地の久池井から二軒半の西にあたる。昭和十五年の調査によると、大願寺部落内にある花崗岩の礎石は四十六箇に及ぶが全部旧位置を移動しているために正確な伽藍配置を知ることができない。柱座径二尺前後の造り出しある礎石が最も多く、門礎と思われるものもある。五社境内には南北約二十間、東西十三間の長方形土段が残っている。周辺調査から条里制の佐嘉郡十四条から十五条にわたる約四坪、乃ち二町四方を寺域にもつ寺院であったと考えられる。単弁丸瓦には周縁一重圏、二重圏、唐草文の三種があり、老司系扁行唐草文をもつ軒平瓦、鴻臚館系軒丸瓦が伴出している。

(16) 久池井遺跡 (佐賀郡大和町久池井) (第6図8)

春日山の南麓、平野への漸移地帯で、肥前国府所在地に推定されているところである。単弁瓦は久池井天満宮東南から発見された破片で、周縁二重圏、蓮弁は大願寺に似るが、側面に一種の花文型押しがみえる点に注意される。その全貌はうかがえないが、施文箇所、手法に新羅系瓦のそれと接近するところがあつて興味深い。

(17) 晴気廃寺 (小城郡小城町晴気字寺浦)

愛宕山南山麓の水田地帯との接地点に在る。塔心礎(径二尺六寸枹穴)と六箇の礎石からなる塔址が残っている。大正初年まで塔址の東に柱座ある礎石群が並んでいたと云われ、金堂址にあたるものらしい。調査者は法隆寺式伽藍配置を想定されている。単弁丸瓦は周縁に唐草文をめぐらし、三重弧文軒平瓦が伴出しているところから両者の組合せが考えられる。更にこの両者は大願寺側と製作瓦窯を同じにするものようである。また、鴻臚館系軒丸瓦と、老司系の変形した扁行唐草文軒平瓦が発見されている。

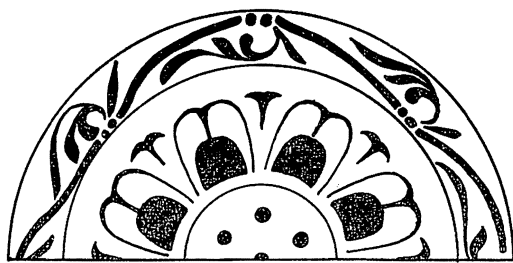
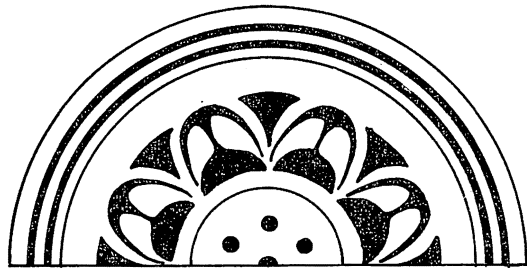
〔筑後〕

(18) 井上廃寺⁽¹⁸⁾（三井郡小郡町井上）（第8図）

国鉄甘木線の筑後松崎駅の北西、井上部落の中にある。昭和三十四年、当時三井高校の柴田泰典教諭から同処出土の極先瓦を見せられてから筆者の注意にのぼり、翌年三月に県教委と共に寺址の測量調査を行ない、古瓦の発見につとめた。遺構は部落内にあるため破壊が著しかったが、大体二町四方の寺域を想定することができた。すでに単弁瓦が出土することは早くから知られ、大宰府町在住の山内興隆氏によってほぼ完形に近い一例が集められていたが、今回の調査によって、九州初見の山田寺系極先瓦をはじめ、老司系軒先瓦のセット、新羅系の文様要素をもつ軒平瓦と共に二種の単弁丸瓦が発見された。Ⅰは単弁七葉で、中房に六願の蓮子（二一五）を入れ、周縁に二重弧文をめぐらすもの、Ⅱはこれから稍脱化し、周縁に段を設け、低い部分に一重弧をめぐらす。蓮弁の手法も硬化している。このⅡ式は筑後国分寺例と同じ製作である点に注意される。

(19) 筑後国分寺⁽¹⁹⁾（久留米市国分町）（第9図1・2）

西鉄バス国分停留所東方の日吉神社境内を中心とする約二町四方の寺域であったと考えられる。人家が立ちこんだため



第7図肥前・大願寺、同晴気廃寺単弁瓦文様復原図(1/4)



第8図 筑後地方発見単弁丸瓦及び同伴瓦（井上廃寺）



①



②



③



④



⑤



⑥

第9図 筑後・豊後地方発見単弁丸瓦及び
共伴瓦 1・2筑後国分寺 3冠
4観興寺 5・6永興寺

に早くから礎石も運び去られたが、最近日吉神社境内に原位置と思われる礎石一箇が露出した。筆者らは昭和三十三年七月に寺域を含む一帯の測量を行い、附近条里の複原も試みて来た。昭和三十九年三月、寺域の北西に創建当初の瓦窯が存在することも確かめられている。単弁瓦は久留米市在住の安元要氏の藏品で、磨滅がひどいために中房蓮子の配置がわからない。井上廃寺Ⅱ式と同製作で、七弁となる。

(20) 観興寺 (久留米市山本町) (第9図4)

曹洞宗観興寺の所蔵資料中に一箇の単弁瓦がある。鶴久嗣郎君の注意にのぼり、すでに紹介された⁽²⁰⁾。

出土地は観興寺近くの北向き傾斜地で部落の中である。発見は江戸時代にさかのぼるようであるからくわしい事情はわからない。瓦当文は単弁六葉で、周縁が欠けている。蓮弁の形も稍狭長で、弁端の反転も硬化している。筑後国分寺例よりも更に脱化した感が強い。

(21) 冠 (浮羽郡田主丸町冠・永松氏邸内) (第9図3)

水繩山麓に在る遺跡で、古く鴻臚館系軒丸瓦の出土地として紹介されているが、同所発見の単弁瓦についてはこれまで知られていない。かつて千代久廃寺と称されているが、正確には字冠に属するのでこの際訂正しておく。単弁瓦は周縁に二重圈をめぐらす八弁式のもので、蓮弁の手法に萎縮した感があり筑前杉塚廃寺や四王寺山の例に近い。

〔豊後〕

(22) 永興寺 ^{リョウコウ} (大分市南大分字永興) (第9図5・6)

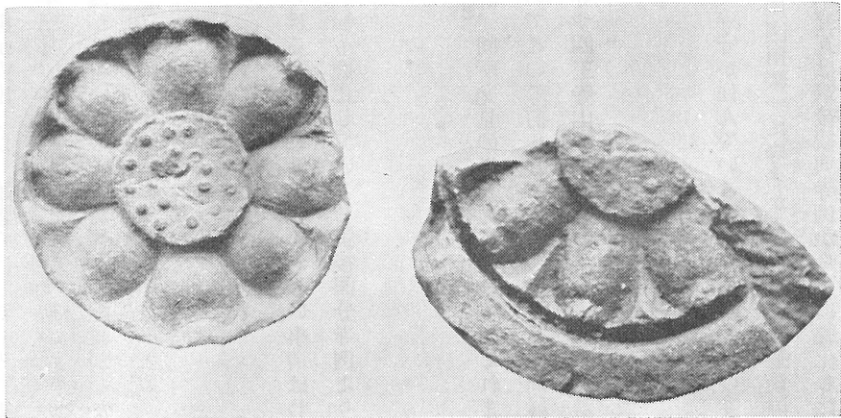
国鉄南大分駅北側の台地に在る寺址で、表面は廃寺であるが、釈迦堂があつて寺守が任んでいる。古く鴻臚館系の変形かと思われる複弁十葉の軒丸瓦や中世の軒平瓦が紹介されている⁽²²⁾。中世、「豊後国⁽²²⁾田帳」に寺名がみえ、古くは豊後国分寺の東半里ばかりに位置している関係からか、国分尼寺に擬する説もあつた。単弁瓦は筑後観興寺例から更に脱化したよ

うな趣きがあり、蓮弁の表面も平たくなって反転の表現が全くなくなっていく。現存するのは二蓮弁の部分のみの小破片である。この東方にある金剛宝戒寺(大分市上野)の古瓦中にも単弁八葉の軒丸瓦二例があつて参考になる。ただし中房蓮子などの手法に他の瓦当文の要素が導入されていて、北九州の単弁瓦からの系譜をたどつてよいものかどうか危ぶまれる。従つて本例も完全であつたならば金剛宝戒寺例から脱化した様式のものとなるかも知れないので現存の小破片からは接極的に登録すべき根拠がない。豊後地域の要注例として紹介するにとどめておく。

このほかにもこの種単弁瓦から変化したのではないかと思われる例は北九州にもあるが、本稿にとりあげる百済系の要素をかなり離れているとみられるので、後日、別に稿を改めることにして省略する。

註(1) 中山平次郎「考古雜録三」(考古学雑誌十一卷三号)大正九年

- (2) 石田茂作「飛鳥寺代寺院址の研究」昭和十一年
- (3) 小田「豊前に於ける新羅系古瓦とその意義」(史淵八十五輯)昭和三十六年
- (4) 小田「九州に於ける法隆寺系宇瓦の展開」(九州考古学3・4号)昭和三十三年
- (5) 賀川・入江・小田「弥勒寺遺跡」(大分県文化財調査報告



第10図 豊後・金剛宝戒寺の単弁丸瓦

- 第七集) 昭和三十六年
- (6) 小田「九州に於ける太宰府系古瓦の展開一〇三」(九州考古学1・2・5・6) 昭和三十一年
- (7) 兼子俊一「大分県下の条里遺構」(大分県地方史四号) 昭和三十年
- (8) 賀川光夫「豊前中津市相原廃寺調査報告」昭和三十年
- (9) 森貞次郎「豊前国分寺」(国分寺の研究下巻) 昭和十三年
- (10) 石田茂作「塔の中心礎石の研究」(伽藍論叢) 昭和二十三年
- (11) 田中重久「塔婆心礎の研究」(聖徳太子御聖蹟の研究) 昭和十九年
- (12) 「基肄城址」(佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第一輯) 昭和三年
- 久保山善映「基山と基肄城址」(同右第六輯) 昭和十三年
- (13) 中山平次郎「古瓦類雑考(九)」(考古学雑誌七卷四号) 大正五年
- (14) 松尾禎作「塔の塚廢寺址」(同右第七輯) 昭和十五年、同「目達原古墳群調査報告」(同右第九輯) 昭和二十四年
- (15) 松尾禎作「大願寺廢寺址」(同右第七輯) 昭和十五年
- (16) 米倉二郎「九州の条里」(九州アカデミー1号) 昭和三十五年
- (17) 七田忠志「肥前晴氣廢寺址と九州地方に於ける古瓦の様式に就いて」(考古学八卷四号) 昭和十二年
- 松尾禎作「寺浦廢寺址の調査」(佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第六輯) 昭和十三年
- (18) 柴田泰典・渡辺正氣・小田「福岡県三井郡小郡町の井上廢寺及び古瓦出土地」(日本考古学協会第二五回総会研究発表要旨) 昭和三十五年
- 小田「九州に於ける山田寺系種先瓦の発見」(歴史考古六号) 昭和三十六年
- (19) 武藤直治「筑後国分寺址」(福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第三輯) 昭和三年
- 三友国五郎「筑後国分寺」(国分寺の研究) 下巻所収) 昭和十三年
- (20) 鶴久嗣郎「筑後觀興寺の古瓦」(九州考古学十三号) 昭和三十六年
- (21) 玉泉大梁・鏡山猛「朝倉橋広庭宮遺址(第二回)」(福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第十輯) 昭和十年
- (22) 河野清実「大分県内の古瓦」(大分県史蹟名勝天然記念物調査報告書第十三輯) 昭和十一年

三。単弁軒丸瓦に関する諸説

わが国に瓦が伝来したことを伝える最古の文献は「日本書紀」崇峻天皇元年(五八八)の条である。乃ち、

百濟系単弁軒丸瓦考(小田)

百済国遣_レ恩率首信德率盖文那率福富味身等_二進_レ調并猷_三仏舍利・僧聆照律師……（中略）……寺工太良未太文賣古子・鏝盤博士将徳白味淳・瓦博士麻奈父奴陽貴文陵貴文昔麻帝弥・畫工白加一

右によれば、造瓦をはじめとする造寺関係の諸技術は百済から公伝せられたことになる。当時の日本と半島との政治的関係に基づいて、百済系文物の伝来がきわめて優位を占めていたことが最も大きな原因であつたろう。従つて、新羅系、高句麗系の文物伝来とくらべるとき、その差は一層明瞭になる。半島系古瓦の分布からみても、仏教伝来初期の畿内及びその周辺では百済系古瓦が主位を占め、法興寺、四天王寺、法隆寺などの大寺に使用せられているが、新羅系、高句麗系の古瓦は畿内をはずれた遠隔の地に分布圏をもっている。そうして、それが記録にみえる三国系帰化人の安置とも重なることが石田博士によつて指摘されている。⁽¹⁾

百済の軒先瓦では軒平瓦の文様は未だはつきりしたものがない。軒丸瓦に独特の裝飾がみられる。石田博士の列挙されるところによつて百済瓦の特徴を示せば、

- (1) 瓦当文様には蓮花文様が絶対多数を占め、
- (2) 其の蓮弁は弁面何等の技巧を弄しないものが多く
- (3) 且つ弁の形は狭長にして
- (4) 中房は小さく蓮子の数も少い
- (5) 縁は素縁にして別に裝飾を用いず
- (6) 製作は薄手にして土質は細かい。

飛鳥地方の法興寺、橋寺、坂田寺などのものは様式から土質にいたるまで百済瓦に類似していて、崇峻紀にみえる百済瓦の渡来が法興寺建立の目的をもつていたと考えるならば首肯できることではある。

前項に列挙した北九州発見

単弁軒丸瓦における特徴は、

中房に七顆の蓮子(一一〇)を

有し(一部の例が一―五)、蓮弁

と中房の間の溝が深く、蓮弁

は単弁八葉(一部の例が七葉)

であつて、弁の先端が反転す

るために末端部の両側に凹み

を生ずる。また各弁の間に楔

形の短い小葉を配している。

周縁は幅広く、瓦当面に対し

てほぼ直角に高く隆起し、重

圈文或は唐草文を陽刻してい

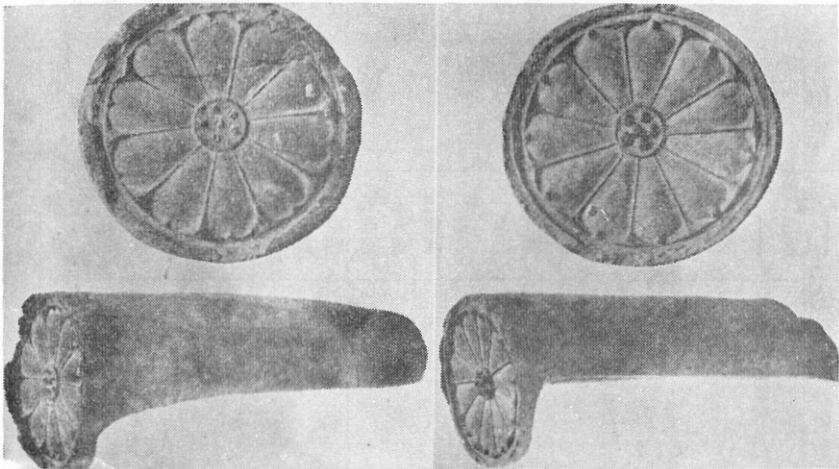
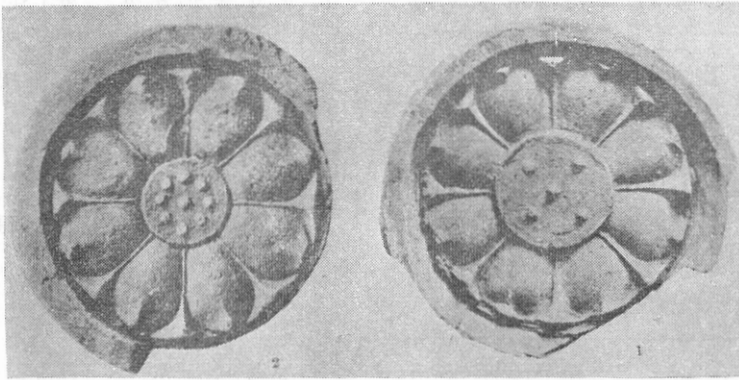
る。このような特色を備えた

軒丸瓦は、前項にもみた如く、

これまで北九州地方に殆んど

限定された分布を示すところ

から、九州地方の古瓦研究者



第11図 百済軍守里廃寺(上)、大和飛鳥寺(下)の軒丸瓦

の間で九州式単弁瓦の呼称で話題に屢々のぼされ、その年代、系統の問題が云々されていた。石田博士はこれを百済系に数えておられるが、所謂百済瓦と並べてみると、畿内の百済瓦或はその変種と比べてみても、別の変化過程をたどったとしなければならぬ。

先ず、前項に掲げた出土遺跡の例を整理してみると第一表のようになる。

次に、従来発表されているこの種古瓦に対する系統論、年代論についての諸説を整理してみよう。

系統論

大別して三説ある。乃ち、(1)故中山平次郎氏は直接百済の影響によるものと説かれ、(2)七田忠志氏は百済系

である点では中山説と同じであるが、その経路については最初近畿地方に入ったものが二次的に九州に伝播したのであると主張され、(3)森貞次郎氏は新羅の影響であると云われる。しかしいずれもその祖型を半島に求める点では一致している。

第一の中山氏の論拠となったのは筑前大野城址(四王寺山)と肥前基肄城址(基山)の例である。その瓦当文の特徴、手法の簡素にして豪放の風を帯びたるは、我が国奈良時代乃至其後の瓦と似ておらず、かえって飛鳥時代古瓦に類似していると指摘された。一方、文献に徴してみても、

天智天皇四年(六六五)秋八月……遣_三達率憶礼福留、達率四比福夫於筑紫国_一、築_三大野及椽_二城_一。(日本書紀)

文武天皇二年(六九八)五月……令_三大宰府繕_三治大野・基肄・鞆智三城_一。(統日本紀)

とあり、更に百済遺跡より出土する古瓦が我が国飛鳥時代のものに類似すること、大野城及び基肄城が朝鮮式山城の体裁をとっていること。また以上の文献から百済の遺臣が築城に関与したことが明らかであるから、その建物の屋瓦も当時の百済式意匠を用いたであろうと推論された。

第二の七田氏の所説は、京畿において白鳳期に推定されている松尾寺の瓦に唐草文を外圍にめぐらすものがあり、九州

では豊前・友枝瓦窯址発見の一例があるとし、更に外圍の文様を異にしても、これと相似た様式をもつ例に法鏡寺、大野城、晴氣廃寺、大願寺、基肄城の単弁丸瓦をあげて同一系統に属するものとされた。そうして百済晩年の故都泗泚（扶余）の例、新羅の旧都慶州の例、慶尚南道高靈の大伽椰（任那の一國）王宮址伝説地の例、大和法興寺（飛鳥寺）の例をあげて、百済系古瓦との類似点が多いところから百済系と説かれた。しかしながら、中山説の如く大野、基肄二城の築城が百済人に關係あるからとの理由で直ちに百済直系と推断することはできないとされ、この種古瓦と対をなす軒平瓦は重弧文や忍冬唐草文ではないか。また、豊前・法鏡寺では我が国白鳳期にみられる雄健な法隆寺系忍冬唐草文瓦を伴うこと。肥前・晴氣廃寺の伽藍配置が法降寺式であること。百済の遺臣を指導者とする大野、基肄二城の築城者の一行が畿内から派遣されたと思われることなどをあげて、この種古瓦は一度京畿の地に伝播せられて後、あらためて九州の地に伝えられた第二次的なものであり、従って百済式瓦の要素の成長持続であり、地方的時代的変改であると論じられた。

第三の森氏の所論は、百済系（飛鳥期）の単弁蓮華文軒丸瓦の系統をもつものであろうことを一応認めながらも、七田氏の云われる飛鳥期瓦から変化したとする説に対して、そのプロセスを知るべき中間様式も知られておらぬこと。また新羅の影響の濃厚な、荘麗な唐草文をもつ豊前・垂水廃寺や天台寺の瓦に伴うところから新羅の古瓦にこの種古瓦の発生過程を求めることは明らかでないけれども、芸術的感覚の秀れた、優美にして精巧なる新羅系瓦から暗示を受け、これを在来の瓦に応用したものであろうと推論された。

以上の所説は、その祖型を半島百済に求める点においては異論ないのであるが、それが百済直系であるか、大和継輪であるかについては否を決定するにいたらなかった。また森氏が七田氏の大和継輪説に対して、そのプロセスを知るべき中間の様式が知られていない点を衝かれたのは正しかったのであるが、同様に新羅古瓦に発生過程を求めることも資料的に提示されていなかったために、決定をみるにいたらなかった。

年代論

続いてこの種古瓦の年代観についてみれば、(1)中山氏は前述の理由から天智天皇四年築造の大野城所属建造物の遺瓦と考えられ、(2)七田氏は「最も先行的と思われるものを出す」大野、基肄二城が天智天皇四年の築城であるから、九州地方におけるこの種古瓦の行われた時期を天智天皇前後以降であるとされ、(3)森氏は大野、基肄二城発見の例は何れも域内に寺院の址を残すので、直ちに上限を天智期まで引上げるとは危険であるとして、前述の新羅系古瓦との関係及び手法からみて白鳳末期から天平期にわたって行われたものであると説かれた。(4)また、故松尾禎作氏はこの種古瓦を奈良末期に比定する説を紹介されている。³⁾乃ち複弁で中房大きく、蓮子多数の系統のものが稍硬化して多弁化し、その界線太く、明らかなものと気脈を通ずる点がある故、これを祖型として更に脱化したものと説明されている。

以上の諸説によれば、この種古瓦の年代観は (1)天智天皇四年乃至その前後に比定するもの、(2)白鳳末期から奈良時代後期に及ぶとするもの、(3)奈良時代末期に比定するもの全く異なる三説に要約される。一九四〇年代までの研究はこのような諸説提起のまま中絶してしまった。この種古瓦の発見遺跡が十例前後の少ないものであり、学術的に個々の遺跡が発掘されたものではなく、偶然の採集資料に拠ることが多かったこと、更には文献に照合しうる遺跡が大野城、基肄城を唯一としていたような状況であったことなどが、この研究を進展させなかつた原因であつたと考えられる。加えてこの種古瓦の分布が北九州に限られる特殊なものであるために、畿内その周辺の識者の関心をさしてひかなかつた。第二次大戦後、類例の発見を重ねて二十遺跡をこえる数に達し、その中には学術調査を経たもの、或は文献に照合して年代を知りうる例が増加するにいたつた。従つて現在では他の様式古瓦との組合せ関係、瓦当文自体の分析をすすめる方法などから更に中絶した研究面を打開することができる⁴⁾と考えるのである。

註(1) 石田茂作「古瓦より見た日鮮文化の交渉」(伽藍論攷)所
(2) 中山平次郎「古瓦類雑考(九)」(考古学雑誌七卷四号)大

収)昭和二十三年

正五年

豊後	筑	後	肥	前					
22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
永	観	筑	井	井	晴	久	大	塔	基
興	冠	後	上	上	気	池	願	ノ	肆
寺	寺	国	廃	廃	廃	井	寺	塚	城
			●	●			●		●
	●		●			●	●	●	
						●	●		

一重圏(Ⅰ)のものは豊前地域に集中しており、筑前、肥前、筑後地域には二重圏(Ⅱ)、三重圏(Ⅲ)、唐草文(Ⅳ)のものが加わってくる。特に唐草文を有するものは肥前の二例のみで他に類例をみない。その文様、施文手法からみて明らかに新羅系瓦との交流が指摘される。

次に蓮弁の形態によってみれば次の三種に大別することができる。

- (A)、弁の先端が瘦せて尖つてみえるもの、その手法には古拙さがただようている。
- (B)、弁の先端が丸く大きく豊満な感覚を盛つたもの。
- (C)、各弁の間隔が離れてきて、弁の先端の反転も弱く、或は全くなくなつて狭長な単純な手法のものや倒卵形の独立した弁を形成するもの。

Aは全体の手法に稍古拙な趣きあるのはさげ難く、Bはこの種蓮弁の最も整備にして完成の域に達したものと思われる。Cは中房、蓮弁、楔形小葉など萎縮して全体に退化の趣きあるのが感じられる。

筑後井上麿寺Ⅱ式と筑後国分寺の例は同范品と考えられるが、特殊な退化の過程をたどるようである。蓮弁と中房蓮子を一箇減じ、二重圏の周縁に段を生じて、下段に一重圏を残している。この様式は井上麿寺Ⅰ式単弁から導き出される。筑後勸興寺例は六葉蓮弁で更に一葉を減じた形式で、周縁二重圏、中房七顆の蓮子を示す点は他地域のそれと共通している。筑後地域では省略化の方向に変遷をたどったことがうかがわれよう。

このような周縁と蓮弁の種類の組合せと、出土遺跡において単弁瓦と共伴する軒先瓦が判明しているものとの関係をまとめてみると第三表のようになった。

豊前地域ではⅡ―A乃至Ⅱ―Bという結びつきが普遍的であり、筑前、肥前、筑後地域ではBとⅢ、Ⅳ、Ⅴが結びつ

第三表 単弁軒丸瓦の分類と伴出資料の関係

前	豊	前	遺跡	周縁	蓮弁	伴出	軒先瓦
12・日吉神社	8・椿市麿寺	1・法鏡寺 2・弥勒神宮寺 3・相原麿寺 4・垂水麿寺 5・友枝瓦窯 6・豊前国分寺 7・上坂麿寺	1・法鏡寺 2・弥勒神宮寺 3・相原麿寺 4・垂水麿寺 5・友枝瓦窯 6・豊前国分寺 7・上坂麿寺 8・椿市麿寺	Ⅰ―B Ⅱ―B Ⅱ―A Ⅱ―A Ⅱ―A、Ⅱ―B Ⅱ―B Ⅱ―A Ⅱ―B	法隆寺系忍冬唐草文平瓦 〔法隆寺系忍冬唐草文平瓦 太宰府(鴻臚館)系平瓦〕 一重弧文平瓦 一重弧文平瓦、新羅系丸平瓦 一重弧文平瓦、新羅系丸平瓦 一重弧文平瓦、新羅系丸平瓦 一重弧文平瓦、新羅系丸平瓦	?	?
9・四王寺山	6・豊前国分寺	1・法鏡寺 2・弥勒神宮寺 3・相原麿寺 4・垂水麿寺 5・友枝瓦窯 6・豊前国分寺 7・上坂麿寺 8・椿市麿寺	1・法鏡寺 2・弥勒神宮寺 3・相原麿寺 4・垂水麿寺 5・友枝瓦窯 6・豊前国分寺 7・上坂麿寺 8・椿市麿寺	Ⅲ―C Ⅳ―B Ⅳ―C Ⅰ―A	法隆寺系忍冬唐草文平瓦 〔法隆寺系忍冬唐草文平瓦 太宰府(鴻臚館)系平瓦〕 一重弧文平瓦 一重弧文平瓦、新羅系丸平瓦 一重弧文平瓦、新羅系丸平瓦 一重弧文平瓦、新羅系丸平瓦	?	?
10・観世音寺	5・豊前国分寺	1・法鏡寺 2・弥勒神宮寺 3・相原麿寺 4・垂水麿寺 5・友枝瓦窯 6・豊前国分寺 7・上坂麿寺 8・椿市麿寺	1・法鏡寺 2・弥勒神宮寺 3・相原麿寺 4・垂水麿寺 5・友枝瓦窯 6・豊前国分寺 7・上坂麿寺 8・椿市麿寺	Ⅳ―B Ⅳ―C Ⅰ―A	法隆寺系忍冬唐草文平瓦 〔法隆寺系忍冬唐草文平瓦 太宰府(鴻臚館)系平瓦〕 一重弧文平瓦 一重弧文平瓦、新羅系丸平瓦 一重弧文平瓦、新羅系丸平瓦 一重弧文平瓦、新羅系丸平瓦	?	?
11・杉塚麿寺	4・豊前国分寺	1・法鏡寺 2・弥勒神宮寺 3・相原麿寺 4・垂水麿寺 5・友枝瓦窯 6・豊前国分寺 7・上坂麿寺 8・椿市麿寺	1・法鏡寺 2・弥勒神宮寺 3・相原麿寺 4・垂水麿寺 5・友枝瓦窯 6・豊前国分寺 7・上坂麿寺 8・椿市麿寺	Ⅳ―C Ⅰ―A	法隆寺系忍冬唐草文平瓦 〔法隆寺系忍冬唐草文平瓦 太宰府(鴻臚館)系平瓦〕 一重弧文平瓦 一重弧文平瓦、新羅系丸平瓦 一重弧文平瓦、新羅系丸平瓦 一重弧文平瓦、新羅系丸平瓦	?	?
12・日吉神社	3・豊前国分寺	1・法鏡寺 2・弥勒神宮寺 3・相原麿寺 4・垂水麿寺 5・友枝瓦窯 6・豊前国分寺 7・上坂麿寺 8・椿市麿寺	1・法鏡寺 2・弥勒神宮寺 3・相原麿寺 4・垂水麿寺 5・友枝瓦窯 6・豊前国分寺 7・上坂麿寺 8・椿市麿寺	Ⅰ―A	法隆寺系忍冬唐草文平瓦 〔法隆寺系忍冬唐草文平瓦 太宰府(鴻臚館)系平瓦〕 一重弧文平瓦 一重弧文平瓦、新羅系丸平瓦 一重弧文平瓦、新羅系丸平瓦 一重弧文平瓦、新羅系丸平瓦	?	?

後		肥		前				
21・ 冠	20・ 観興寺	19・ 筑後国分寺	18・ 井上廃寺	17・ 晴氣廃寺	16・ 久池井	15・ 大願寺	14・ 塔ノ塚廃寺	13・ 基肆城
Ⅲ C	? C	Ⅱ B	Ⅲ B、 Ⅱ B	V B	Ⅲ B	Ⅱ B、 Ⅲ B、 V B	Ⅲ B	Ⅱ A
?	?	筑後国分寺式丸、平瓦	太宰府(老司)系丸、平瓦、新羅系軒平瓦	三重弧文平瓦、太宰府系丸、平瓦	?	三重弧文平瓦、太宰府(老司)系平瓦	?	三重弧文平瓦、太宰府(老司)系平瓦

き、退化した時期(C)に至るまでⅢ、Ⅳが継続する。従って様式からみたこの種古瓦の展開過程は、Ⅱ—Aを古式とし、完成された時期(B)に至って周縁にⅢ、Ⅳ、Vと各種の変化がみられるようになり、やがて退化の時期(C)にむかい、Ⅲ、Ⅳが結びついてゆくと考えられる。このような変遷を裏付けるものとして伴出軒先瓦との関係が参照される。

重弧文軒平瓦と組合った豊前相原廃寺、肥前基肆城址は、他形式の古瓦を出土しない単純遺跡であって、その本来のセツト関係を知ることができる。同様な組合せは他に新羅系古瓦のセツトを共伴する豊前の垂水廃寺、友枝瓦窯址、椿市廃寺でもみられ、相原廃寺と同じ一重弧文軒平瓦とセツトをなすことは疑いない。なかでも垂水廃寺と友枝瓦窯址は需供関係にある遺跡で、単弁瓦も古式のⅡ—AからⅡ—Bへの変化がたどられ、豊前法鏡寺址ではⅠ—Bの単弁瓦と法隆寺系忍冬唐草文軒平瓦の古式のものと同組合っている。これらの点を総合すると、豊前地域の諸例と基肆城址の例は、九州の単弁瓦では最も古い位置を占め、天智築城の基肆城の年代を上限とし、奈良前期を下らない期間に考えられるであろう。この年代観は豊前地域の新羅系瓦とも併行するものとなる。¹⁾しかし初期の単弁瓦、乃ちⅡ—A及び一部Ⅱ—Bを含む時期は新羅系瓦との交流はなく、未だ両者各々個有の特徴を発揮している。

次にとりあげられるのは、太宰府系瓦と共伴する遺跡である。豊前地域の一部分と筑前、肥前、筑後の諸例があげられる。単弁瓦の形態はⅠ—A、Ⅰ—Bを含まず、Ⅱ—B、Ⅲ—B、Ⅳ—B、Ⅴ—B、Ⅳ—Cとなる。ここで注意しておかねばならないのは、この段階の単弁瓦を出土する遺跡には文献操作の方面から年代を考定できるものがいくつか含まれていることである。豊前弥勒神宮寺は天平十年(七三八)の建立で、単弁瓦を出した東塔址は天平十五年(七四三)の建立である。珠文縁の法隆寺系忍冬文軒平瓦、太宰府(鴻臚館)系の均正唐草文軒平瓦を伴出するが、いずれも上限年代は天平十五年をのぼらない。また、太宰府系瓦の本拠である観世音寺は講堂址に単弁瓦を出し、前述した如く天平十八年(七四六)完成であるから、下限年時をここに求められる。豊前国分寺、筑後国分寺の年代については若干の考証を要する。これについては、別に九州の各国分寺の建立年代について論考したことがあるので詳細はそれにゆずり、結果だけを要約すれば、国分寺建立の詔が出された「続日本紀」の天平十三年(七四一)についてはこれまで異論があつて、最も早い年時をとる説は天平九年(七三七)である。また、九州の筑後、肥前、肥後、豊前、豊後、日向の各国分寺は、「続紀」天平勝宝八年(七五六)十二月二十日の記事によつてこの頃成立したことがわかる。従つてその建立に使用された瓦もこの期間に位置づけられねばならない。そうすると、豊前、筑後の両国分寺、弥勒寺、観世音寺の単弁瓦は七三七〜七五六年の約二十年間に限定できる。このうち豊前国分寺と弥勒寺の単弁瓦は極めて類似しており、更には豊前地域の垂水、椿市の廃寺や友枝瓦窯の単弁瓦と似ている。上坂廃寺では豊前国分寺と同范の老司軒平瓦を共有している。このことはⅡ—A式単弁瓦使用の下限を暗示するものであり、Ⅱ—B式単弁瓦がⅡ—A式よりややおくれて出現すること、その使用されている年代の一端を示している。しかも観世音寺では三重弧縁をもち、筑後国分寺では七弁に変化している。両者の蓮弁にはすでに古期に編年されるⅡ—A式、或は豊前地域のⅡ—B式に比べてみると、退化への兆がみえている。従つて、蓮弁自体の観察からA↓B↓Cへの推移をたどれるとすれば、八世紀中葉という時期が単弁様式の最も発達²の絶頂に達したときであ

り、萎縮、退化への転換がはじまったときであるといふことができる。乃ちB式を主体とし、C式への萌芽がみえはじめるときである。

肥前地域ではこの時期に相当するのは大願寺、久池井、晴氣廢寺であつて、瓦当径は最大となり、蓮弁の形態も極度に発達し、それが独特の美観を呈している。三重弧文軒平瓦とセットをなし、太宰府系瓦を伴出するのは明らかに基肄城址例の継承である。また大願寺と晴氣廢寺にみられる唐草文縁単弁瓦(V—B)は明らかに新羅系瓦当文からの導入であり、久池井例の瓦当側面に花文の型押しがあることも同様である。そうすると、肥前地域での単弁瓦の発達には新羅系瓦との交流が原因していると考えられる。また晴氣廢寺のV—B式の蓮弁と筑後国分寺の単弁瓦との間には蓮弁が稍狭長になり、先端が丸くなってゆく点で類似関係を指摘できる。このことは両者の年代が極めて接近していることを示すものであらう。

筑後地域では前述した如く、特殊な変化の仕方をする筑後国分寺と同范の単弁を共有する井上廢寺があり、これは更に井上廢寺でその原型と思われるI式(III—B)があるので、当然様式変遷の上から井上廢寺が筑後国分寺よりも稍古く位置づけられよう。

肥前地域でB式単弁の時期に瓦当径の大型化の現象がみられたが、一方、観世音寺側では逆に小型化への変化がみられる。これは筑前杉塚廢寺、肥前塔ノ塚廢寺へと広がり、共伴瓦にも稍時代的に降下する特徴がみえてくる。筑後の観興寺、冠などもこの範鑄に入るものであり、次第にC式蓮弁への経過が顕著になってくる。このような過程は八世紀後半に顕著になって単弁瓦の退化現象として把握される。従つてその最も極端におしすすめられたものとして筑前四王寺山の例を位置づけるならば、様式上の変遷は最も無理なく説明しうるであらう。ここまでたどってくれば、かつて四王寺山の例を基肄城例と同列に位置づけ、天智築城年時までのぼせて論じたところに無理があつたことを知るのである。単弁瓦の年

代を天智朝といい、天平頃といい、奈良末期というも、帰するところは単弁瓦自体の時間的な変遷を考えずに、すべて同一時点に総括したところに諸説の生ずる原因があったと云えよう。その意味では諸説すべてその一面を云いあてておるのであつて、すべて正しかったとも云えるのである。

そこで四王寺山の例を単弁瓦の終末に考えるとき、大野城址に所属するとすることはできない。むしろ宝龜五年（七七四）造立の四王寺にその上限年代を求めるのが正しいということになる。四王寺の初見は宝龜五年、太宰府をして大野城内に四天王埴像四軀を造像せしめる太政官符を下したのにはじまる。その由緒は次の如くである。

如し聞新羅兇醜不_レ顧_二恩義_一、早懷_二毒心_一常為_二咒咀_一、仏神難_レ誣慮或報_レ応宜令_二大宰府直_二新羅国_一高頭淨地奉_レ造_二像_一攘却其災_上、（「類聚三代格」卷二「造仏々名事」）
（宝龜五年三月三日大政官符）

更に延長八年（九三〇）八月十五日の牒によれば、

大宰府四王寺者為_レ攘_二新羅兇毒_一依_二取勝王經說_一去_二宝龜五年創以所_レ達也、請_二淨行僧侶_一、行_二彞願之旨_一、勅命深重、而歲代推遷懈緩漸成、選_二置法師_一、（「政治要略」卷五十六「交替雜事」のうち）
（「応_レ扶_二補大宰府四王寺四僧_一事」）

とあつて大宰府が宝龜五年の官符を遵行したことがわかる。その所在地については次の諸記録が参照される。

○延暦二十年（八〇〇）春正月甲午朔

……停大宰府大野山寺行四天王法其四天王寺及堂舎法物等竝遷（日本逸史）

○大同二年（八〇七）十二月甲寅朔

大宰府言於大野城鼓峯建堂宇安置四天王佛像令僧四人如法修行而依制旨既停止其像竝法物等竝遷置筑前国金光明寺畢

（日本逸史）

○弘仁二年（八二一）二月庚寅

於大宰府鼓嶺四天王寺造釈迦像（日本後紀）

とあつて四王寺が大野城内に建てられ、その後の変遷を知ることができる。ところで、基肆城の所在する基山にも四王寺が建立されたという説がある。⁽³⁾これは基山を防住山と別称するところから出たようで、大宰府四王寺の年代までひきあげる文献上の拠所はない。また基肆城内に寺院を想定できるような遺構も発見されていないし、単弁瓦も様式上から述べたように奈良前期より下す必要はない。このようにみると、四王寺山の単弁瓦は最も新しい時期に比定するのが妥当と考えられる。

以上によって単弁瓦の年代は豊前の諸廃寺と肥前基肆城に奈良前期を下らない頃に初期様式のものがあらわれ、様式上の整備、発展と共に奈良中期には筑前、肥前、筑後地域に展開し、その過程のなかには新羅系瓦との交流が認められた。この後退化への方向をたどり、瓦も小型化して奈良末期には四王寺例を終末とするようになったと考えられる。この所論によつて各遺跡資料の相対的な編年を組むと第四表のようになる。

×

×

×

北九州の単弁瓦のうち、豊前地方の諸例や肥前基肆城址の例がその初期に属するものであるという結果が出されると、天智天皇四年の大野、椽二城築城の事実が、九州に単弁瓦の移入された契機ではないかという推察は容易に生じてくる。崇峻、推古朝に渡来した百済系の文物受容には平和的な対外親交を基調とする政策がうち出されているが、天智朝の文物受容には対外緊張に伴なう築城術などの比重が大きく加わっている。新しい技術をもつた百済の新帰化人達は、百済滅亡に伴なう百済の王族から下級官、農民などの各階層に及ぶ亡命者達であった。従つて、初期単弁瓦の系譜を考えるには百済扶余時代末期の山城址や寺院調査の成果が参照されねばならない。しかしこの方面の調査に関しては十分な報告がない。ただ、断面的な資料によつてみれば、百済の古瓦にもその末期には九州の単弁瓦に接近した様式へと交遷しているこ

第 四 表 北九州単弁軒丸瓦出土遺跡相對編年表

基準紀年	筑 後	肥 前	筑 前	豊 前	
天智 4 年 (665) 〔大野・基肄城着工〕					白鳳 710
		↑ 基肄城		樅上 市坂 麿寺	相原 鏡寺
天平 9 年 (737) 〔国分寺建立詔〕			日吉 神社		奈
			觀世音 寺↓	↑ 豊	
天平 15 年 (743) 〔弥勒寺塔建立〕	↑ 井上 麿寺 I 式	晴大 氣願 寺		↑ 弥勒寺 東塔	良
天平 18 年 (746) 〔觀世音寺完成〕	冠観 興寺	久池 井		↑ 前国 分寺↓	
天平勝宝 8 年 (756) 〔国分寺完成〕			塔ノ塚 麿寺		時
宝亀 5 年 (774) 〔四王寺建立〕				↑ 四王 寺山	代

百濟系単弁軒丸瓦考 (小田)

- 註 1) 表中 → を付したのは文献に照して上限または下限紀年のわかることを示している。また□で囲つたものは同范の単弁瓦を共有していることを示す。
- 2) 矢印を付していない遺跡は、遺跡相互の関係を対照してその相対的な位置を示したものである。従つて、その上限は若干さかのぼりうることを考慮している。
- 3) 豊後・永興寺例は小破片であるため本表にはとりあげなかつた。

とがうかがわれるので、飛鳥地方の初期寺院にみられる百済系瓦と稍異った様式を生じていることは知られるのである。百済の地で九州の単弁瓦の祖型となりうるような様式に変遷していた段階で、百済の滅亡によって我が国に伝えられ、天智築城を機に北九州に移入されたと考えられる。その過程で蓮弁に若干の改修が加えられ、一重圏をめぐらす「九州式単弁瓦」が実現されて、この頃から畿内周辺に流行した重弧文軒平瓦との組合せを形成したとみられる。従って九州への単弁瓦の移入は畿内を継輪したと考えるのが当をえている。

この時期の新帰化人達は母国の身分や特性をよく伝え、上層階層者は実務や学問の領域でわが国の貴族社会をリードしたが個々の官人であって、一般に氏族構成に欠け、また下層者は集団農民であってすみやかにわが社会に埋没するものであったと云われる。⁴⁾ 彼等の新しい学問、技術はそれ以前の帰化氏族に対して優越し、天智朝政治に即応する重要な支柱とはなったが、秦、漢氏に代表されるような、すでに土豪化した古い帰化氏族には社会的、経済的に及ばなかつたと考えられる。

豊前地方の百済系単弁瓦の存在については、「新撰姓氏録」によって豊前国守宇奴首が百済の系譜をひくものであることにその拠所を求めようとする説がある。⁵⁾ 乃ち、大和国諸蕃の項に、
宇奴首 出_レ自_三百済国君男弥奈曾富意弥_一也

とある。しかし宇奴首が豊前に入ったのは、養老四年(七二〇)大隅日向両国隼人の叛乱に將軍として赴任したことに始まる。従って天智朝に渡来した新帰化人である証はなく、彼に直接の因を求めるのは妥当でない。

豊前地方の百済系単弁瓦は新羅系瓦と共伴する場合が多く、しかも友枝瓦窯では両系瓦が製作されている。また、肥前地方でも両系の要素が同一瓦当文にあらわれるなどの現象があった。

豊前地方の新羅系古瓦の分布が、安閑紀にみえる屯倉設置に伴って秦氏を管掌者とする人々の開発事業に起因するもの

であろうことを旧稿で論じたのであるが、新羅系瓦を生産する同一集団の中で百済系瓦も製作されているということは、新しい百済系帰化人によってもたらされた技術をも積極的に導入して時勢の推移に対応しようとする姿勢のあらわれと考えられるのではなからうか。換言すれば新技術者の若干が彼等の下部組織に包括吸収されたであろうことも考えられるであらう。

両系の古瓦は、最初その特徴を明瞭に保持して出発しながら、百済系瓦の整備される過程において新羅系瓦の手法がとり入れられる方向に両者の交流がすすめられたことはすでに指摘したとおりである。天平以後、九州の古瓦は律令体制の整備につれて太宰府系瓦が主流となってゆく過程で、朝鮮系瓦は次第に個性を失い、影を没してゆく運命にあったが、百済系単弁瓦は奈良末期まで文様の退化を示しながらも命脈を保ったのである。

- (1) 小田「豊前に於ける新羅系古瓦とその意義」（史淵第八十五輯）昭和三十六年
- (2) 小田「国分寺建立の諸問題」（宮崎県教育委員会刊「日向国分寺跡」）昭和三十八年
- (3) 久保山善映「基山と基肄城址」（佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告第六輯）昭和十三年
- (4) 松尾禎作「佐賀県考古大観」続編、昭和三十六年
- (5) 平野邦雄「8・9世紀における帰化人身分の再編」（歴史学研究二九二号）昭和三十九年
- (6) 石田茂作「古瓦より見た日鮮文化の交渉」（「伽藍論攷」所収）昭和二十三年

〔あとがき〕 本稿は昭和三十一年に書いたものであるが、その後の調査によって、本稿に関する重要な新資料の発見があったので、旧稿に加筆して現状に応じられるよう留意したつもりである。本稿のための資料調査には故松尾禎作、賀川光夫、森貞次郎、田中幸夫、吉田良介、北権蔵、原口信行、木原武雄、故荻野弥七郎、高野孤鹿、山内興隆、安元要、柴田泰典、鶴久嗣郎の諸氏、また豊前国分寺、観世音寺、日菅寺、勸興寺、永興寺、祐徳博物館、佐賀県立小城高校、基山中学校などの御好意をうけた。なお、本稿所掲の基肄城址古瓦の写真は鏡山猛先生に御寄贈いただいた。明記して以上の

方々に謝意を表する次第である。また、四王寺山、基肄城の古瓦については、研究の端緒をひらかれた今は亡き中山平次郎先生に、その晩年御助言をいただき、啓発されるところが多かった。その結論においては先生の説と異なることとなったが、筆者の単弁瓦に対する関心は先生の御教示に始まったのである。謹んで御冥福を祈りたい。

(一九六四・九・十三)

**The Single-petal Round Roof-tiles
of the Pèkché Origin**

**—Study on the Ancient Roof-tiles of Korean
Origin Discovered in Kyushu (2)—**

Fujio ODA

Since before the World War II, discussions have been made, by the archaeologists in kyushu, about the ancient round roof-tiles, discovered in northern Kyushu, the designs of which were descended from Pèkché of Korea, especially about their age and their lineage, but no conclusions were gained. The data have been increased, however, and I have succeeded to make clear the regional distribution of them, namely, 8 in Buzen (豊前), 4 in Chikuzen (筑前), 5 in Hizen (肥前), 4 in Chikugo (筑後), and 1 in Bungo (豊後).

The theories on the roof-tiles of Pèkché origin can be classified as follows according to their arguments on their lineage and age.

On lineage : (1) They were directly influenced by Pèkché.

(2) Their designs were descended from Pèkché to Kinki (近畿) region, from where they were introduced to Kyushu.

(3) They were influenced not by Pèkché, but by Silla tiles.

On age : (1) The example of their use was in the building of the Ōno (大野) Castle in Chikuzen in 665 AD.

(2) They were used after 665 AD.

(3) They were used in about 7th and 8th centuries.

(4) They were used in the late 8th century.

Through the analytical studies such as the comparison of the tiles themselves in detail, confirmation of the periods of the remaining sites by examining the old records and so on, I can argue as follows :

Whereas the old style tiles remain in Buzen in large numbers many

tiles are found in modified styles in Chikuzen, Hizen, Chikugo and Bungo provinces. Their age extends from 665 AD. to 774 AD. We can trace the historical process of tile-styles from the embryo stage to the growing and declining stages. Therefore each past theory on the age was concerned only to one period in which the tiles were used. In respect to their lineage, I think that they were imported by the Pèkché people who exiled to Japan as the result of the fall of the Pèkché Kingdom. Judging from the remaining roof-tiles of the mountain castles and Buddhist temples in the late Pèkché era, we must think that the roof-tiles of late Pèkché era themselves had changed gradually to the style similar to those which are discovered in Kyushu and they were used for the first time in the building of mountain castles in northern Kyushu which were constructed under the guidance of the Pèkché people. Afterward, through the adoption of the elements of the tile type of Silla, the Pèkché type of the tiles in Kyushu were changed to the type peculiar to Kyushu. But after the middle of the 8th century the Pèkché type tiles declined with the completion of the Ritsuryo (律令) system centering around Dazaifu (大宰府), and by the end of that century they were completely extinguished.